三十周年記念エッセイ[1]

『神戸っ子』と私の三十年。

陳　舜臣〈作家〉
絵／中西　勝

『神戸っ子』は創刊三十周年を迎えたという。これは私が江戸川乱歩賞をいただいて、プロの作家として歩んできたのと、おなじ年輪というわけだ。『神戸っ子』では、それが三月号にあたるそうだ。私のプロ入り三十周年は、それではいつになるのだろうか？　昭和三十六年十月に受賞式があったが、受賞の通知は、八月四日のことだった。忘れもしない生田神社の夏祭のときで、夕方、店から家に帰る途中、カバンの手提げの部分がはずれてしまった。

——もうサラリーマン生活はやめてよいということかな？

と思いながら北野町の坂を登って行くと、妻が坂の上で手を振っていた。受賞のしらせがあったと、さすがにすくなからず興奮していた。じつは七月のはじめに、最終選考の五篇にはいったので、略歴を知らせよ、という連絡があったので、心待ちにしていたのである。

受賞作「枯草の根」は、四月半ばに脱稿した。五百枚の原稿を投函しに行ったのは、生田神社の春祭の日のことで、生田さんとは縁が深い。というよりは、神戸では生田さんが一種の暦になっているのだろう。

作家生活三十周年を祝うとすれば、脱稿投函の生田さん春祭か、受賞決定の夏祭、受賞式の秋祭か、そのいずれかということになる。だが、ことさらに祝うという気持にはならない。ふりかえってみるというのは、大切なことかもしれないが、なにやら年寄めいて、おもしろくない。このあいだ亡くなった井上靖さんで、私が感心するのは、いつ会ってもつぎの仕事の話をすることだった。

——つぎは孔子を書く。きみ、曲阜へ行ったか

ね？　そこで、きみはどう思った？

と、たちまち取材される。井上さんが回顧談をされるのはあまりきいたことがない。

『神戸っ子』創刊の年の十二月号に、私は十枚ほどの掌篇小説のようなものを書いたおぼえがある。そして、つづいて、「新春雑感」と書けと言われて、ずいぶん人使いの荒い雑誌だと思ったものである。

当時、『神戸っ子』の小さなオフィスは、国際会館一階にあり、立ち寄りやすかった。文化ホールがまだなかったので、神戸に来る芝居はたいてい国際会館だったので、芝居好きの私はよく通った。あのころでは、民芸の「火山地帯」、俳優座の「十二夜」（河内桃子がよかった）、文化座の「荷車の歌」、文学座の「国性爺」などが記憶にのこっている。観劇の帰りにぶらりと『神戸っ子』に寄ると、おいしいお茶が出たものだ。

その年の十一月ごろ、私はラジオ関西で「ミステリーこぼれ話」というシリーズになんどか出演した。迎えの車の運転手氏に、「北野町から須磨まで信号なしで行ける道がありまっせ」と言われその道を通ったことがある。いまでは信じられないだろうが、すこしまわり道だったけれども、三十年前にはそんなノンストップコースがあった。

この一月の直木賞選考会で、直木賞史上最高齢の古川薫氏が受賞した。選考が終わり、しばらく雑談していると、別室の芥川賞選考会から、

――二十八歳の小川洋子さんにきまりました。

という報告があった。選考委員のジイさんバアさん（失礼）、思わずため息をついて、

――私たちが書きはじめたころ、まだ生れていなかったんだね……。

どうやら話がまた回顧的になりかけたが、『神戸っ子』も私もそんな年になったということである。どちらも、おなじ仕事を、ずっと休まずにつづけているところがすばらしいではないか。『神戸っ子』をほめるついでに、自画自讃させてもらおう。

●れんさいエッセイ●ペンのうちそと●30

久しぶりの新劇

三枝和子〈作家〉　え・元永定正

先だって、といっても松飾りがやっととれた一月の中旬のことだが、素晴しい芝居を観た。それも新劇で、である。一生懸命やっていらっしゃる劇団の人には悪いけど、私は、ここ十年来、新劇にあまり身が入らなかった。

五年ほど前、必要があってギリシア語を習おうと決した。新しい語学を、五十も半ば過ぎてから始めることにしたのだから、文字通り大決心である。そのとき、何とか時間を浮かすために、これまで趣味として時間を潰していたものを止めることにした。

「よし、以後、新劇と競馬から下りる」

「ええっ、どうして新劇と競馬が同列に扱われなければならないんだ」

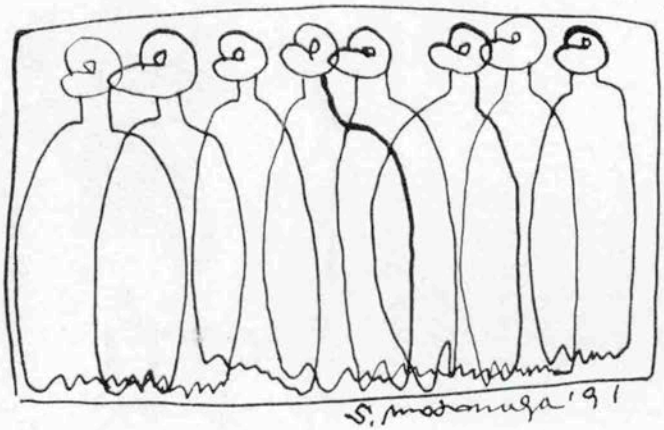
と歎く新劇人もいたけれど、私にとって時間の無駄、という点から考えると全く同じであったのだ。いや、まだしも競馬の方がちょっと惜しかったくらいだ。私は馬券こそほとんど買わないが、シンザン、ウメノチカラの頃からのファンで雑誌やテレビをよく観、時折競馬場に出かけたりしていた。競馬新聞は絶対買わない主義で、競馬場に着くと出馬表だけを掴んで入る。パドックで馬の状態を眺め、自分の頭のなかに入っているデータで自分一人の予測をして愉しむのである。愉しいのは愉しいけれど、本当に愉しむための膨大な時間を考えると、この際、と諦めることにしたのである。新劇の方はだいたい一つの芝居を観るためには家を五時すぎに出かけ、六時半に始まる芝居が九時前に終り、それからあと、何となく不満なので飲屋に行く。観て来た芝居と全く関係のない馬鹿話をして気分を発散させ帰って来るのが午前さま。その日の夜の原稿が書けないのはまあいいとして、翌日まで二日酔いに悩まされる。こんな目にあいながらも、ふんぎり悪く新劇を観続けて来たが、この際、縁を切ろう。

と、まあこんな工合で、ギリシア語の方は必要最低限の会話が出来るようになり、遺蹟などへもひょこひょこ一人で出かけたりするようになった。競馬と新劇を止めたことは、いまや遠い昔の語りぐさ。ところが昨年末、文学座がアトリエ四十周年とかで記念公演に『グリークス』をやると言う。ギリシア悲劇を女性の視点から発想し直す試みだそうで、『男たちのギリシア悲劇』を書いた著者の立場から是非パンフレットに寄稿してほしいとのこと。もちろん本邦初演である。

『グリークス』はジョン・バートンという演出

家が、吟誦詩人のホメロスや、悲劇作家のアイスキュロス、ソポクレス、エウリピデスの作品を適当にアレンジしたものらしい。只今続行中の仕事にもかかわるものだしと引き受けて、はじめてバートン作品を読んだ。女の視点から、とうたってあるだけに、女性を正面に据えて構成し直しているのだが、その女性が、どうも男によってつくられた女性に思えてならないと、脚本に対する不満をつけ加えておいた。

新劇は観に行かないことにしていたが、パンフレットに書いたし、それにギリシア劇だし、と例外をこしらえて出かけることにした。通しを観ると、午後一時から、夜の十時半までかかると聞き、いっそ新劇らしくない通しを観ようと、お弁当持って出かけて行った。文学座のアトリエには食事なんか出来るところはなかったと覚えていたからである。



もともと、私は通し芝居は好きである。通し狂言で一番記憶に残っているのは昭和二十七、八年頃、（ヒャア、我ナガラ古イ）京都南座での『仮名手本忠臣蔵』である。お弁当二食分持って出かけた。当時南座で食堂がちゃんと開いていたかどうか覚えてないが、学生あがりでお金はないし、三階で。しかしちゃんとお寿司を巻いて重箱に詰めて出かけた。泣きながら、笑いながら寿司をばくついた。私はいい芝居を観ると興奮してお腹が空くのである。朝から見続け、大詰近く、討入りになって四十七士が一人一人吉良門前で名乗りをあげると場内総立ち、もちろん三階の私も立ちあがり一人一人に拍手をしたのである。そう、こう書いて来て思い出した。あれは講和条約が成立して、これまで禁止されていた仇討ものなども上演されはじめた、ハシリではなかったか。

『グリークス』は、そのときと同じくらいお腹も空いた。興奮もした。午後一時から夜の十時半までの長丁場が少しも気にならなかった。芝居が良かったのである。それも、女優さんたちが、脚本にも表現されている以上のものを出したのである。台詞に表現されているのは男につくられた女性像だのに、その台詞を口にしながら、つくられた女性像を壊す力が舞台に出た。競馬はともかく、新劇には、もう一度、舞い戻ってみようかしら、などと思ったのである。

□トランペット片手にブラジル一人歩き〈33〉

自然食とドクター・ブレノのオメオパチア療法

絵と文　右近　雅夫〈在ブラジル・サンパウロ〉

ブラジルのティピカルな料理と言えば何と云っても焼き肉料理である。大きな肉の塊を細かく刻んだ玉ねぎ、トマト、セロリー、サルサ等にサラダ油、レモン酢を混ぜて作った「たれ」に浸したもの、或いは単に岩塩をなすりつけただけで串に差し炭火で焼いて食べるのだ。昔は奴隷の食べ物だったが、もう一つブラジル特有の料理にフェジョアーダと云うのがある。僕は此のフェジョアーダが大好きで十数年前迄は毎週の様にレストランテに食べに行ったものである。豚の蹄、鼻、耳、干し肉等を黒豆と一緒に土鍋でグツグツ煮たものでとてもコクのある味がする。この様にブラジル人は一般に肉食が主で、しかも大食漢が多い。

然し最近の傾向は面白い事に豚肉や牛肉を食べないと言う人が僕等の友達の間にも増えて来た事だ。僕等のバンドでコントラバスを弾いているマウリシオはポルトガル系のブラジル人で嫁さんはイラセマと言う中国とパラグァイの混血女性だが二人共厳格な自然食主義者で肉類は勿論、玉子や酪農製品すら食べない。農薬を使わない野菜や果物、穀物を主食にし蛋白質は豆腐でまかなっている。僕の家内のマリアも牛肉や腸詰類を食べなくなってもう八年以上になる。別に宗教的な影響に依るのでなく、牛が殺されるのを予感すると有害物質が牛の血液中に発生するのと、肥らせる為に牛の耳にするホルモン注射が人体に良くないと言うのが彼女の説なのである。僕は十数年前からアレルギー性体質に成り、足に湿疹が出来、痒くなるのであらゆる医者に診察してもらったが一時的に良くなったと思ってもなかなか完治しない

ブラジルには古くからあったが現代医療法と異なった Homeopatia 療法というのがある。十八世紀の末、Friedrich Hahnemann と言う医師がドイツで始めた医療法で、例えば熱が出ると大概の医者は直ぐに下熱剤を飲ませ、抗性物質で細菌を殺すと云う療法を用いるが、オメオパチアでは人体には自然に病気を治す機能が備っており、熱は体内に侵入した細菌を殺す為に出るので一寸した風邪などでは下熱剤を飲ませない。長い間喘息を患らっていた息子のマサヲズイニオがこの療法で完治したので、僕のアレルギーもその医師に診察してもらった。未だ若いがカストロひげに度

の強い眼鏡をかけたブレノ医師は僕に処方箋を呉れると、「これで良う成るやろけど、完全に治したけりゃ牛肉や豚肉を食べたらあかん……」と言った。僕等の家族は親子三人で家内は肉を食べなかったが、それでも息子と二人だけで当時は週最低一キロの牛肉を食べていた。僕は先づ肉を買うのを止め、野菜、豆腐、鶏肉、魚等を多く摂る様食生活を変えていったが、そうすると不思議に足の痒ゆみも無くなり湿疹も無くなってしまった。

今年八十歳になった母が二年前神経痛を患らい体がひょこ歪んでしまった。これはえらい事だと僕は早速母をブレノ医師の処に連れて行った。八時間おきに何滴か飲む薬で治療を始め十日程経つと母は体中に湿疹が出来、顔が腫れ出し、僕の妹達はこんな治療は止めた方が良いのじゃないか？と心配し出した。然し母はブレノ医師を信じ薬を飲み続けたおかげで三十日後に血液検査をするとリウマチの度合いは著しく低下していた。四十五日後にはひょこ歪んだ体も真っ直ぐに成り、二年後の今日母の健康はすっかり良くなった。

ジャズの好きなブレノ医師と僕は大変気が合うので、彼の夫人のマルシアと週末になるとよく家に遊びに来る様になった。大変ユーモアに富んだ彼は、ある時僕が、「生れたてのアマゾンのインディオの赤ん坊の尻にも日本人のと同じモンゴル紫斑が出来るんや……」と得意になって話していると、横からブレノ医師が、「インディオの女は中腰でかがんで分娩するから生れ落ちたインディオの赤ん坊は地面に尻を打ちつけ紫斑が出来るんやろ……」と言って皆を笑わせた。

赤ん坊に関するピアーダ（笑い話）でもう一つ面白いのがある。「生まれた赤ん坊の目が細くて開かないんだけどどうしたんだろう……」と言ってブラジル人の男が医者に相談に来た。「もう一週間もすれば開くだろうけど、何かあったら亦戻って来な……」と言われて其の男は帰って行った。それから三カ月経って其の男が再び医者の処へやって来た。「先生、うちの赤ん坊の目が未だ開かないんだが……」。医師が赤ん坊の目を診察すると目はちゃんと有るんだがとても細い目だった。暫く考えていた医者が其の男に答えた。「開けなきゃいけないのは君の目だよ！君の細君と隣りのジャポネースに用心するんだ……」。

地域文化論

〈その139〉

いい日に見た中川一政美術館

――いい建築といい絵といい文章――

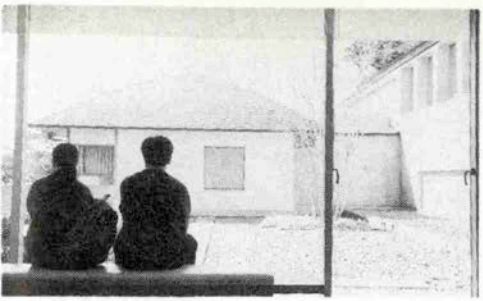
嶋田　勝次
〈神戸大学工学部建築学科教授〉

こんないい日もあるもんだなあ、そして今年は春先からついていると思った。東京での会議は前日のうちにすんだし、こんなに早く、こんなにいい天気で、ここ、中川一政美術館を訪ねて来れるなんて思いもよらなかったのだから。

当建築は熱海の東一時間程のところ、真鶴駅下車、車で十分程南下したところにある。

狭隘な敷地の北側の道路に平行して東西に長く建物が配置されているが、そんなに大きくない建築に、敷地の高低差まで逆手にとって、たくみな変化をあたえ面白く見せてくれている。

この建築デザインの第一のテーマは、まず円形ヴォールトによる組合わせの面白さであり、第二にロビーから中庭がのぞめ、その奥に瀟洒な茶室がしつらえられており、その向うに遠く低く相模湾の白く光る海が風景を形成している。



中川一政美術館

この茶室は木造で屋根は真四角な平面の上に方形のむくりのついた優しさをもっている。

中川一政画伯が随筆〝真鶴〟の中で、私は建築がすきであると云っておられるのを思い出す。

画伯は九十七才でかくしゃくとして、この間までテレビにも出ておられたり、随筆や書にも風格があったし、最近は文庫本まで出されていて、圧倒される様な人間のエネルギーを感じさせられていた。

画伯の画風は大胆な躍動感にあふれたものであり、日本の野獣派とも呼ばれていた。期待していたこの美術館で拝見すると、作品自体もきちんと細かい配慮をもってまとめられているのを感じた。

画伯の画風を知るには、沢山書かれている随想を読むとその文章にいくつものヒントがひそんでいる。少し長くなるが、引用させていただく。

――カンバスに向う時ばかりが画家の時間ではない。画家は頭でも画を描いているものである。人の顔を見れば人の顔、景色を見れば景色、それに向ってこれをどう云う風に表現したら画になるか考へてゐるものである。それらを含めた時間を画生活と云ふので、画布に向っている時ばかりが画生活ではないのである。想を練ると云ふのもさう云う描かない時に行はれるので、画家が段々高尚になってくれば来る程、さう云う時間が沢山になる。――

この美術館を見学出来た一両日後の二月五日に、中川画伯が大往生されたというニュースに接した。

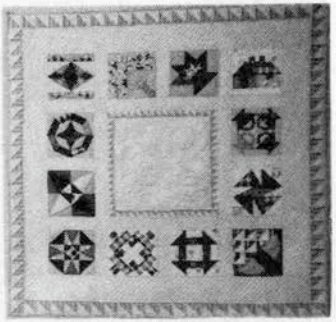
この巨星の跡は埋めようもない気持がしてしまう。

「僕は本当に生きて生誕百年記念展をします」と言っておられたそうだから、もう少し長生きされたら、更に新しい美術館が生まれたかもしれない。それでなくても出身地の金沢の近くの松任市につづいて新しい記念館になるこの美術館の存在は嬉しい。

暗い北陸の地とは対照的に明るく、周辺環境は全体としてはのびのびとしている。美術館の直ぐ南側から散策路が真鶴半島の先端の岬までつづいている。

おだやかな早春に最適な時を持つことが出来た幸をかみしめつつ帰路の新幹線に乗ったら全身白いみごとな富士山が見送ってくれた。

KAKINUMA GALLERY



壁　掛
（パッチワーク）

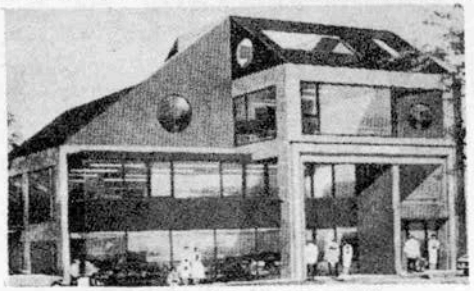
松丸直美・作
オン　キルト
パッチワーク教室主宰

作品は飾るより、どんどん使って生活にとり入れて欲しいと思っています。針に慣れて「優しい気持ちになる時間を持つ」って素敵なこと。衣服の再利用をすると愛着もひとしおですよ。

（柿沼産婦人科に展示３／１～３／31）

芦屋 柿沼産婦人科

★健保適用　産婦人科・内科（女性専科）



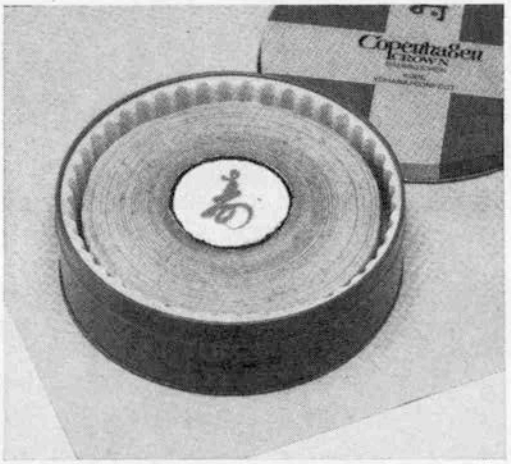
阪神芦屋駅北へ１分・芦屋警察署東隣り

☎（0797）31－1234（ＦＡＸ兼用）

当GALLERYに掲載ご希望の方は月刊神戸っ子まで御連絡下さい。

祝福の言葉を
この銘菓に託して
贈ります

――――――ブライダルギフト



バウムクーヘン
￥1000～￥2000

――北欧の銘菓――

ユーハイム・コンフェクト

1st. Kobecco

●第一回　神戸っ子賞選考座談会

神戸が恋人、映画が恋人
日本の洋画隆盛の貢献で
淀川長治に

★偉業を為した人材の多い街神戸

――今年で小誌も30周年となりますので、〝神戸っ子賞〟という賞を新設したく思います。その趣旨は、分野を問わず、神戸出身か、あるいは神戸在住かで、より神戸っ子らしく活躍された方に贈りたいと思います。

A　まず作家の方から挙げて行きましょうか。私は、**陳舜臣**を挙げたいですね。神戸っ子創刊の時に、江戸川乱歩を受賞されて作家生活が30年という同い年なんですよ。

B　**小松左京**も神戸高校出身ですね。**田辺聖子**、**筒井康隆**も神戸を舞台にした作品が多い。

C　その他に作家の方と言えば、**宮本輝**、**山崎正和**。

A　**野坂昭如**も忘れてはならないでしょう。

C　音楽関係では、大阪フィルの**朝比奈隆**が筆頭ですね。東灘に住んで居られますが……。又、バイオリンの**辻久子**も挙げられると思います。ソリストの常として、秘めたる情熱を、独奏時に一気にぶち上げる。

B　画家の**東山魁夷**も凄く神戸らしいけど、長野に東山美術館が出来てしまいました。書家の**望月美佐**も落とせませんね。国際派になって来た。美術方面では、先に挙げた方のほかに、建築家の**清家清**も、小原会館など神戸らしい。

B　宝塚歌劇団では演出の**内海重典**。ポートピア'81、ユニバーシアードなどお祭りの演出が上手い。「ベルばら」の演出家、**植田紳爾**も滝川中学から早稲田ですよ。ミュージカルスターとして活躍する**鳳蘭**も神戸らしい。

A　ファッション関係にも、デザイナーの**田中千代**が居ますね。

●察査員出席者

小笠原　暁氏
<芦屋大学教教>

石阪春生氏
<画　家>

小泉康夫
〈前月刊神戸っ子〉
〈代表取締役社長〉

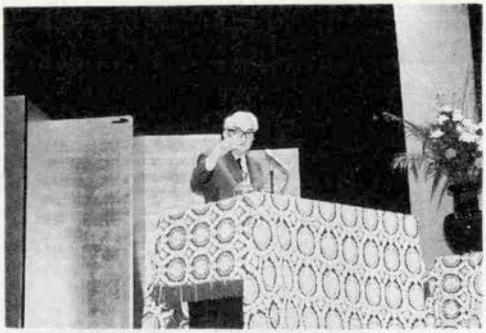
C　映画部門では、大御所の**淀川長治**が居ます。若手監督の**大森一樹**も今後ますますの活躍が期待できますね。『ヒポクラテス達』は秀作です。

――学界、実業界の方達はどうでしょうか。

B　神戸大学の前学長である、**新野幸次郎**が挙がりますね。彼は、総合大学の学長では唯一文科系の学者です。

又、YMCAの**今井鎮雄**も特筆すべきですね。神戸という街の国際化に果たす役割は大きい。

A　実業界では、凰月堂の**下村光治**が、又、**佐本進**の文化的な功績が大きく、どちらも昨年に亡くなられて残念です。



上　第一回イベントコレクションで熱演される淀川長治先生
下　映画発祥地神戸記念碑を建てる会第一号の募金を

B　本当に惜しい方でしたね。**ジャン・メルオー**神父も、音楽家としてグルマンとして貴重ですよ。

★淀川長治に決定

C　私は、一度新開地で、映画の話を聴いた事があるのですが、二時間に七本の映画を見た感激そのままが伝わる名講演でした。

――**乾豊彦**も名古屋高商出身で、養子さんなのですがね。財界の中で一番神戸っ子らしいのは乾さんかな。乾豊彦も切り離いです。オシャレだし。新しい東広野ゴルフ場の設計もなさいましたし、貢献したという点では屈指の方です。日本ゴルフ協会の会長を永く務めておられましたしね。

A　前宮崎辰雄市長や、**石野信一**神商会頭もいらっしゃるけれど、もう、立派な賞を頂かれている。

C　お歳の事を考えるとやはり淀川長治がいいのではないでしょうか。メリケンパークの映画記念碑の設立にも貢献されましたし、今回ぜひ「神戸っ子賞」をお引き受け頂いて、それを、例えば「淀川映画記念館」等に繋いでいけばいい。神戸JCやロータリークラブ等が、それのかじ取りをして行ってくれれば申し分ないですけどね。神戸JCの方でも対象が映画であれば、大衆的で、広く喜ばれる事でしょうね。

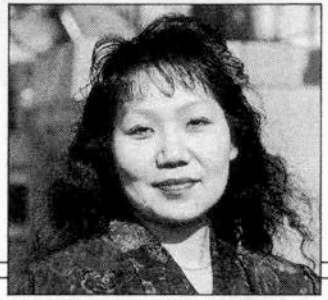
先の新開地での講演の時など、ほとんどメモを見ずに話されるのです。「生きている映画博物館」と呼べそうですね。なにしろ二時間、聴く者としては、映画に関する単なる評論を聞いたというだけでなく、何か生の映画をたて続けに7～8本見た感動の様な気持ちを感じましたね。凄い情熱！

又、第一回の神戸っ子賞にハイカラ神戸のにおいがしみついた方で、最適だと思いますね。

＜文中敬称略＞

（兵庫倶楽部にて）

20th Blue Mer



●第二十回 ブルーメール賞選考座談会
《文学部門》

天性のストーリーテラー 夏巳ゆらこに

●審査員出席者

杜山 悠氏
<作 家>

河内厚郎氏
<『関西文学』編集長>

田靡 新氏
<作 家>

A 今年もなかなかいい作品が集まりました。「夏の或る日」の服部洋一は、もう作家として出来上がってるんじゃないですか。

B そうなんです。過去にも文学会新人賞や神戸文学賞を取ったり単行本も出ているんです。かなり有名な人ですよ。

C 今回集まった作品の中では、別格と言ってもいいと思います。読めば分りますね。

B 文章に芸を持っている人だと思います。鋭い感性の持ち主であるということに尽きます。

A 随分昔に文学の勉強会をやっていた時のイメージとダブりました。未だにあの頃の文学の流れが生き続けているんだな、と。

C もう他に言うことはないという感じですが、「春の光」の東山緑はどうでしょうか。

A 少し書き方が安直ではないかと思ったんですが。

C 小説というよりもエッセイを読んでいるような気にさせられたのも事実ですね。

B 確かに作品の煮つめ方が不完全なところがないとは言えませんが、私は古典的な教養とモダニズムを身につけているところを買うんです。エッセイ風だという意見を否定は出来ませんが。

C そこが問題ですね。

B ところで「小山羊ばしのもっきりや」のちだ正之はどうでしょう。これは小品ですから、これだけで評価するというのは無理ではないかと思うんですが。

C 達者な印象は受けるものの、今ひとつよく分りません。

B 語り口調に、もう少し工夫がいるのでは。

A そこが物足りなさかも知れませんね。同じように不満が残った

のが「旅の途中」の夏巳ゆらこでした。最終的に焦点が定まっていないという感じでしたが。

C　これは、彼女の持っているもの総てを出し切ったんじゃないかというくらいよく書けていると思うんです。パリに舞台を据えているんですが、聞けばパリには余り長く行っていなかったそうなんです。それでよく現地の生活に密着したものが書けたな、と感心しているんです。

B　ある程度の力のある人だというのは分りますね。二百枚もの長さを飽きさせずに読ませるのは、ストーリーテラーとしての力量でしょうし、人物描写も手慣れていますね。

A　そういうところは認めます。確かに非凡な才能ということが出来ますね。最後になりましたが、「蜜月旅行」の朝田麻里はどうでしょうか。私は何度か会ったことがありまして、それとは関係なく大きく買っている人なんですが。

C　面白さが広がらずに集束してしまっているきらいはありますが切り口が変っていて新鮮味を感じました。

B　何かを感じさせる人ですね。

A　誰でもそう言うんですよ。

B　もっと書けそうな人ですか。

A　――そう思います。

C　将来性の豊かなところを感じますね。今の「蜜月旅行」と「旅の途中」の二作品のうちどちらかに決めていいように思いますが。

B　そうですね。服部洋介の場合今さら、という気がしないでもないですから。

C　どちらにしても、受賞作として恥しくはありませんね。

B　すぐにエッセイでも書かせるなら、夏巳ゆらこがいいと思います。朝田麻里は他のものも見てみたいです。

C　そうですね。受賞したらもっといいものを書くと思います。

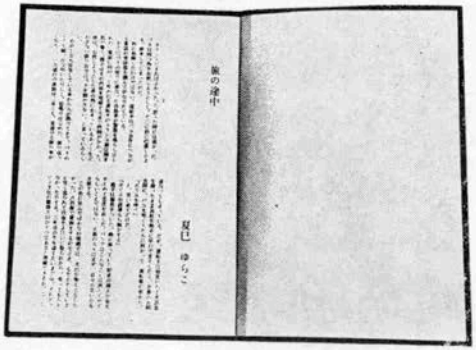
B　朝田麻里の場合、どちらかと言えば文学賞を取った方がより張り合いが出来て頑張ると思うのですが。

A　その方が面白いでしょうね。これからまだまだ伸びる人だと思います。では「旅の途中」の夏巳ゆらこが受賞ということですね。

BC　それでいいと思います。

〈文中敬称略〉

▶受賞作が掲載されていた同人誌「崖」▶



旅の途中

夏巳　ゆらこ

■受賞者メモリアル

1.	詩／中村　隆	11.	詩／季村　敏夫
2.	小説／郷　承博	12.	小説／福岡　勝利
3.	短歌／小泉八重子	13.	詩／時里　二郎
4.	小説／福本　早夫	14.	評論／松尾美恵子
5.	詩／三宅　武	15.	詩／武田　信明
6.	小説／秋吉　好	16.	小説／山西　史子
7.	詩／江頭　越子	17.	詩／たかとう匡子
8.	小説／桜　井利枝	18.	小説／森　栄枝
9.	小詩／梅村　光明	19.	詩／田中　紀子
10.	小説／吉保　知佐		

20th Blue Mer

●第二十回 ブルーメール賞選考座談会
《音楽部門》

堅実な活動と完成度の高い作曲で大前哲(さとし)に

★低迷が続く中で……

A 今年も候補が少ないですね。ここ数年間、音楽界は低迷の状態が続いていますね。

B 改善のきざしが一向に見えてきませんね。

C ブルーメール賞は神戸を中心に活躍をしているアーチストが受賞することになっていますから、選考が難しいですね。

B 僕は、去年も候補にあがった**右近恭子**（ピアノ）を推薦しますね。秋の大阪でのリサイタルは非常に良かった。大阪文化祭賞の本賞もとっていますし。

A 僕は、**稲庭達**（バイオリン）を推します。宝塚のベガホールでのコンサートは評価できます。

B たしか初めてのリサイタルでしたよね。以前に日高毅さんとジョイントで演奏していますし、その後も積極的に活動しています。

●審査員出席者

出谷　啓氏
<音楽評論家>

小石忠男氏
<音楽評論家>

柴田　仁氏
<音楽評論家>

A それから、神戸に本拠を置いているニューフィルハーモニー管弦楽団。あるいは、**武田博之**（指揮）とニューフィルという形でもいいのですが。神戸ではコンサートを2回開いていますし、芦屋でもよくやっています。大阪での演奏も含めて、総合的に判断するとニューフィルは高い評価ができます。ブルーメール賞が励みになれば、と思います。

C 何度も候補にあがった**垣花洋子**（声楽）はどうでしょうか。今が盛りだと思うのですが。それから、**大前哲**（作曲）と**北野徹**（打楽器）のコンビ。昨年10月のいずみホールでの北野のリサイタルは非常に完成度が高かった。どちらかというと、大前より北野を評価したいのですが。

B この2人は、曲が出来る段階で綿密な打ち合わせをして、共同

作業で行っていますから、どちらでもいいのではないでしょうか。むしろ僕は大前哲を評価したいところですね。

A　しかし大前は西宮市在住で、神戸でもコンサートをあまりやっていないのでは。

★神戸に土壌づくりを

――候補者が大体出尽したようですね。少ないようですが、この中から絞り込んでいきましょう。

B　中堅でしっかりとした活動を行っているのは大前ですね。右近はまだ新人という感じですし、年齢も若い。もう少し待ってもいいのではないでしょうか。

C　大前は、平均して力を持っていますよ。最近ではオランダやベルギーなど、ヨーロッパ諸国でもよく演奏されていまして、国際的にも知名度が上っています。

B　彼なら納得がいきますね。

A　僕も基本的には賛成なのですが、神戸で活動をしていないということが、どうしても気になるのですが。ニューフィルは、この春から兵庫県下で広く演奏する予定です。そのときに〝勲章〟になるものがあれば……。

B　県下を一巡し終わったときの方がいいのではないでしょうか。

A　篠山や丹波まで演奏を聞きに行くのですか？

C　団体は、いつ解散するかわかりませんよ（笑）。

B　僕ももう少し時間を置く方がいいと思います。右近と同じように新人のワクから出ていないような気もしますし。

A　それでは、ニューフィルは来年の最有力候補として、今年は大前哲で決定としましょう。

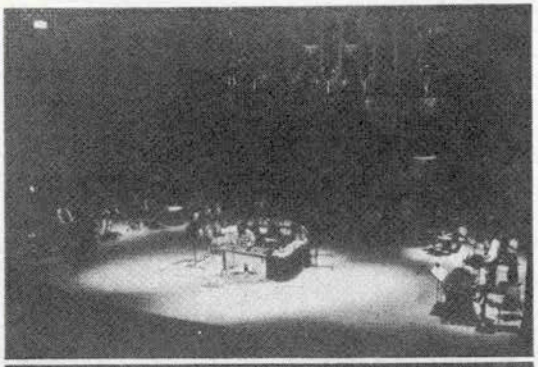
B　神戸で活躍してくれることを期待して（笑）。

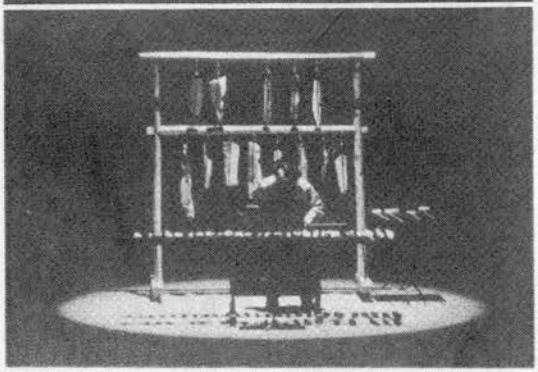
C　神戸を離れてしまうアーチストは多いですからね。

B　腰をすえて活動が出来るだけの環境や土壌が、神戸にはありませんから。ホールなどの施設や行政の対応、マスコミから注目度、すべてにおいてね。

A　これからは、そういう土壌づくりを、市民も行政も真剣に考えなければなりませんね、本当に文化を育てる気があるなら。

＜文中敬称略＞





昨年10月、いずみホールで開かれた「北野徹打楽器リサイタル」

■受賞者メモリアル

1.	田原	富子／ピアノ	11.	伊藤	ルミ／ピアノ
2.	矢野恵一郎	／合唱指導	12.	井上	和世／声楽
3.	上月	倫子／バレエ	13.	末広	光夫／プロデュース
4.	今岡	頌子／バレエ			
5.	小石	忠男／音楽評論	14.	安芸	栄子／声楽
6.	中村	茂樹／作曲	15.	延原	武春／指揮
7.	関	晴子／ピアノ	16.	中西	覚／指揮
8.	坂本	環／声楽	17.	青井	彰／ピアノ
9.	山内	鈴子／ピアノ	18.	広岡	隆正／声楽
10.	松本	幸三／声楽	19.	戎	洋子／ピアノ

20th Blue Mer

●第二十回 ブルーメール賞選考座談会
《美術部門》

ここ数年ものすごい上り坂の田中 昇に

——まず印象に残った方々を紹介していただきます。

A 前回の兵庫の美術家展に取り上げた名前の中から昭和30年代生まれの作家を紹介するとまず、**池田真規子**。安井賞で活躍、モノクロームのイメージでがっちりとした絵を描く**木津文哉**。トアロード画廊でよく個展を開いた**児玉靖枝**。現代工芸の**重松あゆみ**。コラージュなんかを使いながらがんばっている**春澤振一郎**。**伴野久美子**。版画の**東かおる**。現代木彫の**本掘雄二**。**松村武夫**。倉吉での菅盾彦賞日本画展で優秀賞を取った**森田りえ子**。その他では伊丹クラフト展で大賞を取った**砂吹瑤平**。同じく銀賞を取った**川西幹雄**。年配ではあるがますます独自のグラフィックでがんばっている**辰馬喜代子**。

B すごい鉄板の仕事をした**井沢井佐子**。立体で今年たいへん活躍をしている**梶滋**。**田中徳喜**は団体だけでなく個展はするし、とても前衛的なものをしますよ。

C その他では去年も出たが**河崎晃一**、**塚脇淳**、**田中昇**、**松井憲作**。

●審査員出席者

赤根和生氏
<美術評論家>

増田洋氏
<兵庫県立近代美術館次長>

D 新しいところでは**藤原護**。**井上和則**もがんばっていたし、**門脇正弘**もいい仕事をしました。

A 前にも候補に上がっていますが**松田一戯**。岐阜の現代木彫コンクールで賞をとっています。最近仕事がまとまってきたのは、**牛尾啓三**。染色の世界では**関川知賀子**。県展では大賞をとっています。

B **赤松玉女**はボローニャで活躍しているようですが。

C **坂口正之**も水戸の芸術館の開館の時に作品を出しています。

A びっくりしたのは**小野田実**の彫刻です。中から光が見えるんです。いい仕事ですね。

D ちょっと書いてあげたいのが第14回美術公募展をした**ローズガーデン**。シティギャラリーの**向井修一**。神戸らしいネーミングです。

C **吉原通雄**がカムバックしています。ローマの国立近代美術館具

体展で会員がパーフォーマンスをしたのですよ。

A 彫刻では広嶋照道がかなりあっちこっちのコンクールに出品しています。

B 去年アメリカで個展をした藤原昭三。それからこれは話題ですが異色の作家、田中寅彦。

C 坪田政彦も個展をしました。

D その年代までいくと注目するのは中川安一。あの世代の方が個展をするというのが少ない中で積極的に個展をしました。

――ではそろそろ絞りこんでいきたいと思います。

C だんだん若くなっているので20回記念で逆戻りしては。名前をあげる機会がなかったがこのごろになって活躍してきた人という点では田中昇はどうだろう。須磨離宮彫刻展では面白かったです。

六甲アイランドシティ野外彫刻展優秀賞受賞作品、現在六甲アイランドに設置されている

高橋　享氏
<大阪芸術大学教授>

伊藤　誠氏
<姫路市立美術館副館長>

D 停滞せずに一生懸命具象の世界でコツコツ仕事を広げていっていますね。意欲は充分です。

B 絞りこんで梶滋、田中徳喜、田中昇の3人ぐらいでしょうか。

A 西の代表として牛尾啓三か。松田一戯もいますねえ。梶滋の応援演説をするならば今年の作品はよかった。鏡の面の作り方は非常によかったです。

C 田中昇はベテランの域に入るが、最近フレッシュでよくなってきています。

D 梶は今年が賞を取るチャンスだと思いますが。

D 梶か田中か、難しいところです。写真判定という事になります。

A 二人にあげられると一番いいのだが、どちらかという事になると田中昇に決定しましょう。

<文中敬称略>

■受賞メモリアル

1.	彫刻／山口　牧生		11.	平面／木下佳通代	
2.	造形／丸本　耕		12.	造形／宮崎　豊治	
3.	洋画／小西　保文		13.	平面／藤原　志保	
4.	版画／藤原　向意		14.	建築／武田　則明	
5.	平面／斎藤　智		15.	平面／石川　晴久	
6.	洋画／郷　相和		16.	平面／松原　政祐	
7.	洋画／山本　文彦		17.	造形／植松　奎二	
8.	造形／堀尾　貞治		18.	彫刻／松本　薫	
9.	造形／榎　忠		19.	造形／杉山　知子	
10.	版画／松谷　武判				

●第二十回 ブルーメール賞選考座談会
《ファッション部門》

神戸を拠点に世界に羽ばたく 二代目 柴田音吉に

A 昨年はKFFがウィーンをテーマに大変華やかでしたね。

B ニュークリエーターはバッチリと世紀末のウィーン・モーツァルトやクリムトなどに焦点を絞って力作がでていました。ニュークエリーターは**山下博子**（ワールド）**辻内恵子**（オールスタイル）**梶野加恵**（ヴァレン）**竹内千香**（ジャヴァ）**泊三枝子**（イズム）**岩田明**（アバン）らで皆さん頑張っていらっしゃいますね。会社へ入って10年選手ということですが、それぞれ個性があって楽しみですね。

C でもこの企画で残念なのはお金がかかるので、社によって出れるところとそうでないところがあることです。将来はその辺のところを何とかしてほしいと思います。また、前日の**ヘルムートラング**はヨーロッパあたりではうけがいいのですが日本人のファッショーショーの見方というのはちょっと違うのではないかと思います。

D ニュークリエーターはじっくりみせてもらいましたが、作品よりもピーター佐藤、伊藤タケシが逆にもりあげているというかんじでちょっと作品のみせ方がおろそかになっているという感じがして

A クリエーターの人達の印象はどうでしたか。

B イズムの泊、着れそうな服を出していました。右の袖と左の袖が全然ムードが違うような、この人は地味だけどおもしろい。ワールドの山下は、最後にまさにクリムトの絵から抜け出たと思うようなものを出していました。そういう能力は素晴らしいですね。オールスタイルの辻内、ニットの作品全体に統一したムードが感じられて一番個性がでていたように思います岩田は男の子だなっていうのを出していましたね。

C ニュークリエーターの人ではないのですが、私は柴田グループの**柴田新社長**を推薦します。四代目で二代目音吉を襲名し、神戸洋

●**審査員出席者**

福富芳美さん
<神戸ファッション専門学校校長>

藤木ハルミさん
<デザイナー>

服のハイカラの伝統の心意気をみせました。また、大阪、東京に新社屋を創り、紳士服ではあっといわせました。紳士服の業界の頼もしいリーダーになると思います。

D　実は紳士服では最近勉強してくれる若手があまりいないので困っているのです。

A　柴田音吉は本店の入り口に神戸洋服を仕立てるところをみせたいと言っておられます。脚光を浴びせて誇りをもって服を創る現場を作ってほしいです。

C　パールクリエーターでは田崎真珠の**内海和子**なんかは古いけど、それからのちに賞をとった人がいても表面に出てきませんね。

A　マイファッションで優賞した**青木健二**はとてもいいですね。

D　紳士服装専門学校の米谷先生のところには将来有望な女の子がいるんです。**金岡みゆき**という。ショーの中でもいつも一人だけ光っています。ウェディングにしても何にしても全然違いますよ。

C　私は着られる服をこれからは作ってほしいと思います。神戸ファッション専門学校にも、**吉田みき**という大変いい人がいます。コンテストに出すところは全部何らかの形で通っています。流行通信でも2番になりました。

A　そろそろ誰に賞をあげるか決めたいと思います。私は柴田音吉にぜひあげたいですね。あれだけ世界的にがんばっているという人は少ないですから。

D　我々、紳士服業界にとっては嬉しい話です。

A　では今年のファッションショー部門は柴田音吉に決定します。

＜文中敬称略＞

柴田音吉を襲名する披露パーティー

小泉　美喜子
＜本誌編集長＞

中島　正義氏
＜ファッションオーダーなかじま社長＞

■受賞メモリアル

1. 服飾デザイナー／藤本ハルミ
2. 神戸市心身障害福祉センター／米田博司
3. ニットデザイナー／市野木江充子
4. コウベジュニアテーラーズクラブ／KLTC
5. アートフラワー／太田タマコ
6. コウベファッションソサエティ／K. F. S
7. パール／「真珠の街・神戸」を考えるプロジェクトチーム
8. 家具／神戸市家具青年会
9. コウベファッションモデリスト／K. F. M
10. 書道家／望月美佐
11. コウベファッションクリエーターズ／K. F. C
12. ジャーナリスト／村上和子
13. デザイナー／中村一夫

●第二十回　ブルーメール賞選考座談会
《舞台芸術部門》

輝く実績と共に地域文化への貢献

貞松・浜田バレエ団に

★意欲と努力で充実

A　この部門では、日舞、洋舞、能楽、演劇、その他がありますが、まず能楽から挙げましょうか。

B　上田拓司が第一回リサイタル〝長田能〟で〝井筒〟を舞い、若々しく新鮮な舞台で将来が楽しみです。また、久田微二が第五回〝舜一郎と微二の会〟で〝藤戸〟をとりあげました。四番目物に挑む意欲を買います。次に、日舞では、大和松蒔と若柳吉金吾が相変らず活躍しています。大和松蒔は〝石橋〟〝正月〟で充実感が出て来ました。

C　ただ獅子の扱いが初めてという事もあり、少しぎこちなさがありました。

B　若柳吉金吾は新作の〝月と弱法師〟と〝江島生島〟に意欲を示しました。

C　〝江島…〟では心で演じることと、所作でする事の区別が解って来ましたね。またこの人は、弟子も大事に育てていますし。

B　藤間莉佳子が藤間秀馨追善舞踊を主催し、藤間藤子が来神して〝松の翁〟を舞いました。母の遺産を守り、さらに一般に広めようとする努力は良い。大御所の花柳寿晃は大阪・東京の国立劇場で〝旅奴〟〝吉原雀〟を舞い、健在ぶりを見せ、味のある舞踊の模範を示してくれました。

C　花柳小三郎は上手くなりましたがもう少し伸びて欲しいね。

A　次は洋舞ですが…。

C　貞松・浜田バレエ団が〝白鳥の湖〟全幕と〝くるみ割り人形〟全幕を関西フィルハーモニーフルオーケストラで上演した事は素晴しい実力でした。

B　高瀬浩幸の成長も著しく、又藤田雅子、貞松正一郎のコンビも

●審査員出席者

佐野漣箕氏
<元神戸新聞取締役文事局長>

名生昭雄氏
<兵庫県立宝塚北高校校長>

岡田美代さん
<演出家>

良かった。関西フィルに助けられた点もありますが、全体にバレエらしい華やかさが出ていましたね。

A 団体で光るのは大変な事。昨年、一昨年とレベルを保っているのは団員皆が切磋琢磨し成長している証拠ですね。

B バレエコンクールは3年目になりますが、昨年はクラシック部門が特に良くなかった。毎年やる事の良さと悪さが現れて来たようで、一考の余地がありませんか。他に、**阿部米造**が〝伴須美・阿部米造スペイン舞踊公演〟で従来からのパントマイムをさらに充実し、今年も海外に行かれるそうですが、世界的視野の活躍を買います。

C 演劇では賞の対象となるものが無いなかに、**四紀会**はポリシーを持ってがんばっていますね。

B 新劇はセリフを鍛えて欲しい

A 泥もがんばっているが、まだまだ賞には届かないね。

B 邦楽の唄では、歌詞を勉強して欲しい。言葉の裏に意味があるのですから。神戸市立博物館の〝**邦楽サロン**〟は第五回を迎え、一般の人に邦楽の良さを分り易く聞かせる努力が結実して来ました。息長く普及化に努めて欲しいものです。

C 他に**甲南大学歌舞伎教室**の〝封印切〟とジャパネスク歌舞伎の〝勧進帳〟がありましたが、**海野先生**の抜群の指導力が光りますね。

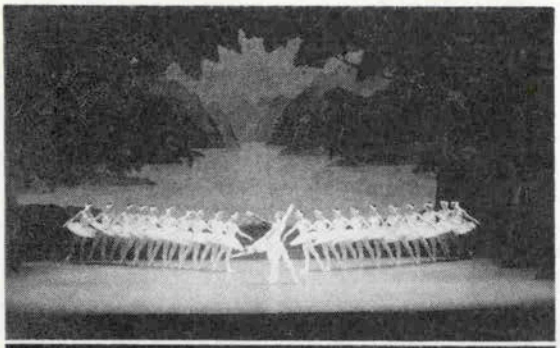
★研鑽を忘れずに

B 凰月寄席やオペラに力を注いだ凰月堂の**下村光治**と、シアターポシェットの**佐本進**が亡くなった事は大変心が痛みます。得難い理解者でした。

C このブルーメール賞は、今までの研鑽を賞しさらに伸びて欲しい願いを込めています。これまでの受賞者も忘れずにますますがんばって欲しいですね。今年のブルーメール賞は全員異議なく決定ですね。

B **貞松・浜田バレエ団**の実績を讃え、又地域社会でのバレエ団の在り方は誠に意欲的であり、長年の著積と実績を高く評価します。

＜文中敬称略＞



上／貞松・浜田バレエ団創立25周年記念公演。「白鳥の湖」('90年1月5・6日於神戸文化大ホール)
下／「くるみ割り人形」('89年4月16日於神戸文化大ホール)

■受賞者メモリアル

1. 邦舞家／花柳恵一子
2. 邦舞家／若柳吉由二
3. 能楽師／吉井　順一
4. 邦舞家／花柳芳五三郎
5. 邦舞家／花柳　吉叟
6. 邦舞家／藤間緑寿郎
7. 邦舞家／尾上　菊見
8. 能楽師／藤井　徳三
9. 仮名手庵歌舞伎／海野　光子
10. 演劇／コメディ・ド・フーゲツ
11. モダンダンサー／加藤きよ子
12. 舞踊家／藤田　佳代
13. 邦舞家／花柳五三輔
14. 映画監督／白羽　弥仁
15. 邦舞家／松本　尚壽
16. 笑クリエイト社／楠本　喬章
17. フラメンキスト／東仲　一矩
18. 能楽家／久田　徹二
19. 邦楽／大和楽「蘭の会」